アクティブ☆チャイルド☆サポーター通信

＼運動・スポーツの大切さを科学的に解説／

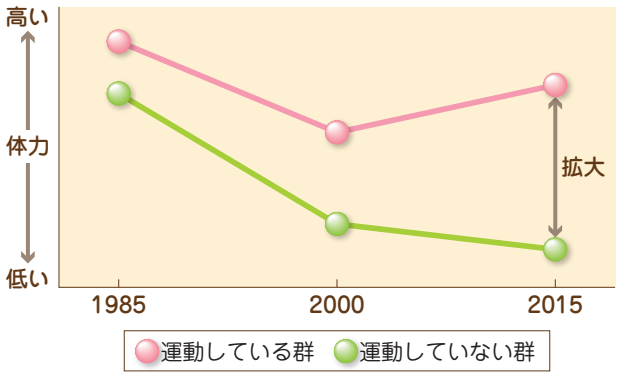
みんな回復！？　体力今昔物語

文部科学省は1964年の東京オリンピック以降、子供の体力を毎年調査しています。

東京オリンピックを契機に子供の体力は上昇しました。そして現在40歳代の大人が小学生だった1985年頃に体力が最も高くなり、その後は低下し続けました。2000年頃に体力の低下傾向は収まり、現在に至るまで横ばいか向上傾向にあります。

明るい兆しが見えますが、実は好転しているのはスポーツ少年団や運動部活動などに参加しているような定期的に運動を行っている子供たちだけということがわかっています。そして、1985年頃の体力にはまだまだ及びません。

昔と今とでは子供が置かれている環境に大きな違いがあります。大人が子供だった頃を思い出し、今の子供たちに遊びを通して体を動かすことができる環境をどのように提供してあげられるか、考える必要があると思いませんか。



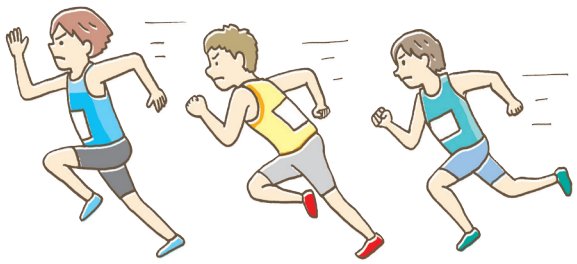
良い兆し　五輪の波に　乗る元気

＼コラム／ オリンピック・パラリンピック

参加することに意義がある

「参加することに意義がある」という言葉は、オリンピックの生みの親であるピエール・ド・クーベルタンの言葉であると勘違いされることや、「その場に居れば良い」という意味で誤用されることがあります。

1908年にイギリスのロンドンで開催された第4回大会の綱引き競技において、イギリス代表とアメリカ代表の対戦がありました。この際に、警官が主なメンバーであったイギリス代表は底に鋲を打った靴を使用していました。これにアメリカ代表が抗議しましたが、審判が拒否したため、不服としたアメリカ代表は棄権してしまいました。この事件に対し、後日行われたミサの際にアメリカ選手団に随行していたペンシルベニア大司教のエチュルバート・タルボットが発したメッセージが「参加することに意義がある」であったのです。



後に、クーベルタンはこの大司教の言葉に加え、「人生で重要なのは、成功することではなく、努力することです。大切なのは、勝利したかどうかではなく、よく闘ったかどうかなのです」と添えています。つまり、「参加することに意義がある」の本当の意味は、「その場で最大限の努力をすること」なのです。